



Title	関西弁の「タ形」の形成について
Author(s)	山下, 好孝; Yamashita, Yoshitaka
Citation	日本語・国際教育研究紀要, 22, 77-86
Issue Date	2019-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73447
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJLIES22_06_yamashita.pdf



関西弁の「タ形」の形成について

山 下 好 孝

関西弁の「タ形」の形成について

山下 好孝

1. はじめに

日本語教育ではいわゆる辞書形（終止形）から様々な動詞活用形が作られる。日本語教員によっては辞書形からではなく「マス形（連用形）」から変化形を作るように指導している人もいるが、これは誤りである。なぜかという「アクセント（強勢）」まで含めて正しく指導するにはマス形から他の動詞形を導くことは不可能だからである。

日本語の標準語における辞書形から他の動詞形へのアクセント規則は概ね次の表のようにまとめることが出来る。表の「無核類動詞」とは動詞辞書形（終止形）にアクセントのないものを指す。「有核類動詞」とは辞書形でアクセントを持つものを指す。数字の「0」はアクセントのないことを示し、「02. 03」はそれぞれ語末から2 番目、3 番目の拍にアクセントがあることを示す。

表1 日本語動詞形のアクセントパターン

	無核類動詞	有核類動詞	
辞書形	0	02	例外:返す、帰る、考える、通る、申す、参る (03)
ナイ形	0	03	
ナイデ系	03	04	
ナケレバ形	04	05	
マス系	02	02	
バ系	02	03	
可能形	0	02	
意向形	02	02	
意向形+と思う	0	02	
受身形	0	02	
使役形	0	02	
使役受身形	0	02	

テ形	0	03、02	2拍一段動詞は02：見る、出る、
タ形	0	03、02	2拍一段動詞は02：見る、出る、
タラ形	02	04、03	2拍一段動詞は03：見る、出る、
テモ形	02	04、03	2拍一段動詞は03：見る、出る、
タイ形	02	02	
タイ＋と思う	0	02	

例) 変える 食べる
 する 来る
 寝る 出る
 もらう 分かる

逆に言うと、辞書形と動詞のグループ（五段動詞、一段動詞、変格動詞）さえ分かれば、アクセントを含めた動詞形が正しく導き出せるということである。

では日本語の有力な方言である関西弁に関してはどうかであろうか。実は、関西弁には標準語には見られない特性があり、標準語の場合のように単純に動詞形を導くことは出来ない。本稿はこの関西弁の動詞変化形のうち、過去を表す「タ形」生成の規則を記述することを目的とする。

2. 「高起式」と「低起式」

前の節で述べたように、標準語動詞にはいわゆるアクセント（またはアクセントの核、滝）を有する動詞と、有さない動詞が区別される。それぞれ「有核類」と「無核類」と名付けられている。

- 1) 有核類動詞：書く、泳ぐ、話す、立つ、喜ぶ、読む、走る、飼う
 ；食べる、起きる；来る
- 2) 無核類動詞：聞く、つなぐ、越す、死ぬ、飛ぶ、揉む、知る、買う
 ；寝る、着る；する

一方、関西弁動詞では音調が高く始まる「高起式」と「低起式」に分類される。

- 3) 高起式(H)：聞く、泳ぐ、話す、喜ぶ、死ぬ、励む、走る、買う

；寝る、着る；する

4) 低起式(L)：書く、漕ぐ、指す、立つ、読む、取る、飼う

；食べる、見る；来る

そして関西弁では基本的に辞書形にはアクセントが置かれない。すべて無核類となる。

次に関西弁の「ナイ形（否定形、未然形）」の形成規則を概観する。

関西弁のナイ形では、基本的に語尾から数えて、第3拍目にアクセントが置かれ、高起式、低起式は維持される。「H」の記号は高く始まる高起式であることを示す。「L」は低く始まる低起式であることを示す。「[□]」は直前の拍にアクセントの滝（核）があることを示す。

5) 高起式：H 聞く → H 聞か[□]へん

H 泳ぐ → H 泳が[□]へん

H 買う → H 買わ[□]へん

H 寝る → H 寝[□]へん

6) 低起式：L 書く → L 書か[□]へん

L 取る → L 取ら[□]へん

L 飼う → L 飼わ[□]へん

L 食べる → L 食べ[□]へん

ところが低起式の一段動詞、変格動詞の2拍のものは、語頭にアクセントが置かれるため、高起式に転換する。

7) 低起式：L 見る → H 見[□]ひん

L 出る → H 出[□]へん

L 来る → H 来(き)[□]ひん、(京都方言)

H 来(け)[□]へん、(大阪方言)

H 来(こ)[□]へん、(神戸方言)

いずれにせよ、関西弁では元の辞書形の高起式、低起式という区別が意味の区別に大きな役割を果たす。「H 買わ[□]へん」「L 飼わ[□]へん」のような違いは出だしが高いか低いかによってのみ区別されるのである。さ

らに高起式の動詞の場合、アクセントが前の拍に移っても、意味の弁別には影響を与えない。

8) H しらべる (しらべる) → H しらべ[↑]へん
H しら[↑]べへん
H し[↑]らべへん

*H しらべへ[↑]ん
(*は正しい形式ではないことを示す)

したがって関西弁のいくつかの下部方言では次のようなバリエーションも見られる

9) 高起式: H 聞く → H 聞か[↑]へん → H 聞[↑]かへん
H 泳ぐ → H 泳が[↑]へん → H 泳[↑]がへん
H 買う → H 買わ[↑]へん → H 買[↑]わへん

いずれにせよ、関西弁では、出だしが「高い」ことが決定的に重要であるということである。

一方、標準語の方はアクセントの有無が決定的な役割を果たす。「飼わ[↑]ない」「買わない」の区別はアクセントの有無だけである。

3. 「タ形」を導く規則

前節では「ナイ形」の産出規則について述べたが、「タ形」についてはどうか。

標準語においては辞書形が有核類であればナイ形同様タ形でもアクセントが生じる。

10) 書[↑]く → 書[↑]いた
泳[↑]ぐ → 泳[↑]いだ
話[↑]す → 話[↑]した
来[↑]る → 来[↑]た

ただし一段動詞（上一段動詞、下一段動詞）の有核類で、3拍以上のものは、アクセントの位置が1拍分前に移動するという規則がある。

- 11) 食べ[□]る → 食[□]べた
起き[□]る → 起[□]きた

有核類の一段動詞であっても、2拍動詞ではこの現象は起こらない。

- 12) 見[□]る → 見[□]た
出[□]る → 出[□]た

無核類の動詞では、タ形になってもアクセントは生じない

- 13) 聞く → 聞いた
寝る → 寝た
する → した

一方関西弁では

- (A) 五段動詞か 一段動詞か
(B) 高起式 (H) か 低起式 (L) か
(C) 拍数が2拍か、3拍か、4拍以上か

という3つの要素が関わってくる。

- 14) 五段動詞、高起式 拍数2
H 聞く → H 聞[□]いた
H 飛ぶ → H 飛[□]んだ
H 死ぬ → H 死[□]んだ
15) 五段動詞 低起式 拍数2
L 指す → L 指した
L 切る → L 切った
L 読む → L 読んだ

16) 五段動詞 高起式 拍数3

H 走る → H 走[↑]った

H 失う → H 失の[↑]うた → 失[↑]った

H 冷やす → H 冷や[↑]した

17) 五段動詞 低起式 拍数3

L 入る (はいる) → L 入[↑]った

L 参る (まいる) → L 参[↑]った

L 食わす (くわす) → L 食わ[↑]した

18) 五段動詞 高起式 拍数4以上

H 頑張る → H 頑張[↑]った

H 嫌がる → H 嫌が[↑]った

H いたぶる → H いたぶ[↑]った

19) 五段動詞 低起式 拍数4以上

L 拘る (こだわる) → L 拘[↑]った

L 差し出す → L 差し出[↑]した

L 捕まる → L 捕ま[↑]った

五段動詞のタ形の場合は、基本的に後ろから3番目の拍にアクセントが落ちるが、低起式の2拍動詞の場合のみアクセントは現れないという特性を示す。

次に一段動詞の場合を見てみる。

20) 一段動詞 高起式 拍数2

H 寝る → H 寝[↑]た

H 着る → H 着[↑]た

H 居る → H 居[↑]た

21) 一段動詞 低起式 拍数2

L 見る → H 見[↑]た

L 出る → H 出[↑]た

22) 一段動詞 高起式 拍数3

H 開ける → H 開[↑]けた

H こける → H こ[↑]けた

H 焼ける → H 焼[↑]けた

23) 一段動詞 低起式 拍数 3

L 見せる → L 見せ[↑]た

L 落ちる → L 落ち[↑]た

L 起きる → L 起き[↑]た

24) 一段動詞 高起式 拍数 4 以上

H 調べる → H 調[↑]べた

H 聞こえる → H 聞こ[↑]えた

H 諦める → H 諦[↑]めた

25) 一段動詞 低起式 拍数 4 以上

L 捕まえる → L 捕ま[↑]えた

L 捉える → L 捉[↑]えた

L 加える → L 加[↑]えた

一段動詞の場合は、五段動詞より複雑な様相を示している。まず2拍のものは高起式でも低起式でも語末から2番目の拍にアクセントが落ちる。したがって辞書形で低起式であってもタ形では高起式に変換される（「見る」「出る」）。

3拍以上の一段動詞のタ形は基本的に、後から3拍目にアクセントが落ちるが、低起式の3拍動詞に限り、後から2番目の拍にアクセントが落ちるという特性を示す。

以上のことから結論として次のグループの動詞が不規則となる。

26) 五段動詞 低起式 2拍 → アクセント 0

一段動詞 高起式 2拍 → アクセント 02

一段動詞 低起式 2拍 → アクセント 02

一段動詞 低起式 3拍 → アクセント 02

（他の動詞類は「アクセント 03」という規則でまとめられる）

最後に、変格動詞のタ形についても触れておく。

27) L 来る → H 来[↑]た アクセント 02

H する → H し[↑]た アクセント 02

どちらも一段動詞の2拍のものと同様、後から2番目の拍にアクセントが落ちている。これらが中心部を構成する複合動詞になっても同様である。

- 28) L 持って来る → L 持って来[┐]た
H 連れて来る → H 連れて来[┐]た
H 勉強する → H 勉強し[┐]た
L 掃除する → L 掃除し[┐]た

4. 最後に

関西弁と標準語には、「高さ」を基調とする方言か、「強さ」を基調とする方言であるかという差異が存在する。標準語のタ形形成においては、「強さアクセント」の有無という観点で規則をまとめることが出来る。しかし、関西弁のタ形の形成に於いては、26) で示したように、動詞の辞書形の拍数が関与するということが分かった。

動詞の拍数ということに関連して、標準語の可能形の「ら抜き」現象に触れておく。

「ら抜き」は一段動詞とカ行変格動詞に起こると言われている。

- 29) 見[┐]る → 見られ[┐]る、見れ[┐]る 02
寝る → 寝られる、寝れる 0
起き[┐]る → 起きられ[┐]る、起きれ[┐]る 02
食べ[┐]る → 食べられ[┐]る、食べれ[┐]る 02
変える → 変えられる → 変えれる 0
来[┐]る → 来られ[┐]る、来れ[┐]る 02

しかし、4拍以上の動詞では「ら抜き」現象は起こりにくいとされる。

- 30) 調べ[┐]る → 調べられ[┐]る、?? 調べれ[┐]る 02
諦め[┐]る → 諦められ[┐]る ?? 諦めれ[┐]る 02

また標準語の2拍名詞がアクセントのパターンを変えていることも観察されている。

- 31) 熊 (くま[↑]) → く[↑] ま
時 (とき[↑]) → と[↑] き
事 (こと[↑]) → こ[↑] と
物 (もの[↑]) → も[↑] の

単語の拍数がアクセントに与える影響があるのか、今後とも考察していく必要がある。

参考文献

山下好孝 (2013) 『関西弁講義』 講談社学術文庫

やました よしたか (高等教育推進機構国際教育研究部教授)

Formation of “TA-forms” in Kansai-ben Japanese

YAMASHITA, Yoshitaka

In Standard Japanese, the verb Ta-forms are delivered from dictionary forms automatically. Those verbs which have stress accent in dictionary forms carry stress in the third mora from the end of Ta-forms. Those verbs which lack stress in dictionary forms also lack stress in Ta-forms.

In Kansai-ben Japanese, nevertheless, the rules of formation of Ta-forms are very complicated. In this study I analyzed the formation of these forms. First Kansai-ben verbs are divided into High Tone Verbs and Low Tone Verbs. Secondly these verbs are analyzed furthermore according to the number of morae which compose the dictionary forms. Thirdly the verbs are classified into 5 dan group and 1 dan group.

In summary Kansai-ben Ta-forms are classified in the following 12 groups.

- 1) High Tone Verbs with 2 morae in 5 dan group: KIKU (to listen)
- 2) High Tone Verbs with 2 morae in 1 dan group: KIRU (to wear)
- 3) High Tone Verbs with 3 morae in 5 dan group: HASHIRU (to run)
- 4) High Tone Verbs with 3 morae in 1 dan group: AKERU (to open)
- 5) High Tone Verbs with more than 3 morae in 5 dan group:
GANBARU (to do one's best)
- 6) High Tone Verbs with more than 3 morae in 1 dan group:
SHIRABERU (to investigate)
- 7) Low Tone Verbs with 2 morae in 5 dan group: KIRU (to cut)
- 8) Low Tone Verbs with 2 morae in 1 dan group: MIRU (to see)
- 9) Low Tone Verbs with 3 morae in 5 dan group: HAIRU (to enter)
- 10) Low Tone verbs with 3 mora in 1 dan group: MISERU (to show)
- 11) Low Tone Verbs with more than 3 morae in 5 dan group:
TSUKAMARU (to get caught)
- 12) Low Tone Verbs with more than 3 morae in 1 dan group:
TSUKAMAERU (to catch)